第17回研究大会

口頭発表「相模獣医師会（神奈川県）での取り組み」
～まずは動物を飼う第一歩を～

松崎　智彦

１　はじめに

相模獣医師会は神奈川県海老名市、綾瀬市、座間市、大和市の開業獣医師で構成される任意団体である。各市より１名が学校飼育動物委員に選出される。

我々は、児童のために動物を飼育してもらうにはどうすれば良いか考えており､安心して飼育できるシステムを作り、さらに様々な企画を行っている。

２　教師と獣医師の合同学習会

年に１回、講師を招き、合同学習会を行っている。毎年、教育委員会と数回に渡る会議を行い、現場での要望や問題点を汲み取り、講演内容を決定している。教育委員会と密に連絡を取り合っている事は、非常に良い事で強みであると考えている。

合同学習会の目的は３点あげられる。1つ目として、学校飼育動物の大切さを知ってもらい、メリットを理解してもらう事である。各種動物の飼育のアドバイスを、講師の経験を含めて解説してもらっている。２つ目に、現在飼育している動物の問題点を、講演を通じて解決する事である。事前に全小学校にアンケートを行い、講師に可能な限り回答を頂いている。３つ目に、動物を飼育していないクラスの教諭に対し、児童の為に動物を飼育してもらえる様な講義をお願いしている。どういった教育的効果があるか、実例をあげて説明してもらっている。

合同学習会には、４市50小学校より約80人の教諭が参加している。この事は、４市の教育委員会が学校飼育動物の大切さを理解されている証拠だと考えている。

2014年には新しい企画として、実習を取り入れた。以前は、講義の中で兎やチャボの飼育方法や教育的効果に関して、重点的に説明してもらっていたが、モルモットを推奨するために企画した。モルモットリレーなどを行い、モルモットは飼い易い動物であり、省スペースで飼育でき、飼育委員のみのお世話ではなく、クラス全員で触れ合う事ができる事を知ってもらうためである。

３　「モルモット飼育の指針」の作成

上述の合同学習会の後にはアンケートを実施している。毎年、各小学校の飼育係の教諭が変わってしまう事も理由であるが、同じ内容の質問が多い。鶏・兎を飼育する大きな設備が無い、購入するお金がない、どこで動物を購入するのか、病気になったらどうしたら良いか分からない…といった意見が多い。各小学校で、それぞれの壁が存在し、飼う事を踏み出せない事が示唆されていた。そこで、我々は、モルモットの飼育を獣医師会と教育委員会として強く奨める指針を決定し、文書化した。そうする事で、安心して動物を飼い始める一歩を踏み出せるのではないかと考えている。A4サイズの紙１枚で、年度始めと合同学習会で配布している。

伝えたいのは、動物を飼育するメリットである。携帯電話や小型ゲーム機を使用する児童の増加、塾などの夜型生活の児童の増加など、児童を取り巻く環境も大きく変化している。動物飼育により、生命を尊重し、心を豊かにする手立てと考えている。

さらに、飼育委員のみのお世話ではなく、クラス全体で触れ合って欲しいという事である。クラス単位での飼育と飼育委員のみの飼育では、子どもの成長に有意な差があると言われている[(1)][(2)]。限られた子ども達の飼育では教育的効果が

薄いと思われ、なるべく多くの児童に触れてもらい、命というものを知ってもらいたいと考えている。その結果として一人の人間として必要な「責任」もついてくると考えている。そういう意味では、モルモットの性格や、教室内にて衣装ケースで飼育出来るモルモットは最適であると思われる。

４　モルモット診療に関する勉強会

獣医師会として「モルモット飼育の指針」を作成した事により、対応できる臨床的知識が必要と考え、2年前からモルモット診療に特化した勉強会を始めた。

５　各市における学校飼育動物の診療や巡回指導

我々は４市に渡り活動を行っており、行政により予算や方針が当然異なる。各市における活動内容を簡単に説明する。

＜海老名市＞

市長の理解と協力が得られ、予算が上がり、おそらく小学校にとっても安心してもらえているシステムと思われる。また、獣医師会の垣根を越え、非会員の有志の獣医師も、小学校飼育動物の活動に従事している。1小学校に1獣医師が担当し、巡回指導や診療を行っている、

＜大和市＞

非常に少ない診療予算である事から、小学校飼育動物の診療は全て獣医師会でさせて頂いている。以前、非会員に1ケ月で年間予算を使われた事があり、予算のシステムを変えた。

診療時には、教育委員会に間に入ってもらい、小学校→教育委員会→獣医師会学校飼育動物委員会→近隣の会員の病院を紹介というシステムを作り、動物が病気になる事で､パニックにならない様に、潤滑に診療させて頂いている｡おそらく、動物の調子が悪いと現場で混乱すると予想される。当然、教諭は小学校での勤務と同時に動物の事を考えなければならないので、大変だと思われる。そこから、数少ない、兎など小動物が診療できる動物病院を探すと、最悪の場合、手遅れになる可能性がある｡このシステムにより、教育委員会にさえ連絡すれば、診察をする獣医師をスムーズに見つける事ができ、好評頂いている。

＜綾瀬市＞

診療システムは大和市と同様。

６　今後の取り組み

課題としては、4市の足並みを揃える事があげられる。市により方針が異なるのは当然であるが、行政に声をあげる事で現場の混乱を招く事態にもなりうる。場合により、獣医師会学校飼育動物委員会と教育委員会の繋がりが消滅する可能性もある。少しずつでも、飼育数や費用を含めて実績を作り、訴えていく事が大事だと思われる。私たち獣医師会としては、横の繋がりとして活動内容を確認し合い、良い意見を教育委員会に進言していきたい。

４市の小学校で飼育している動物を調査すると、金魚や亀などの鑑賞動物を除くと、少ない様に思われる。特に鳥インフルエンザの影響からか、動物が死亡すると以降は飼育をしないという話もよく聞かれる。また、飼育している動物は、ほぼ兎である。おそらく飼育委員のみのお世話になっていると予想されるが、なるべく児童全員で触れ合ってほしいと考えている。獣医師会して、教諭に対して動物を飼う一歩を踏み出す為に、様々な企画を行い、また検討もしている。中島らの報告[(1)]では、一学年のすべての児童が飼育に携わる「学年飼育」の研究にて、動物に触れ合う事で、心の豊かさや人への思いやりに有為差が出たと報告している。そのため、飼育委員のみでなくクラス全員で飼育に参加できる体制作りが必要と思われる。1クラスでも動物を飼い始めてもらえる様に努力を継続し､また、教諭には動物を飼うメリットを少しでも理解してもらえる様に検討していきたい。

我々が学校飼育動物に関する事業に対して修正、改革を行ったのは、この２、３年である。他の地域に比べるとかなり遅れている部分があるが､これから10年、20年かけて少しずつでも近づける様に、努力を継続していきたい。

（相模獣医師会）

【参考文献】

(1) 中島由佳ら（2011）．学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響．日本獣医師会雑誌、64、No3、227-233
(2) 小学校での動物飼育体験のあり方から見た作文の分析、中川美穂子ら